

人間失格

烈火の如く怒られそうな気がしてたまらず、逢うのに頗るおっくうがる性質でした
ので、いよいよ、銀座は敬遠の形でしたが、しかし、そのおっくうがるという性質
は、決して自分の狡猾さこうかつではなく、女性というものは、休んでからの事と、
朝、起きてちりからの事との間に、一つの、塵ほどの、つながりをも持たせず、
完全の忘却の如く、見事に二つの世界を切斷させて生きているという不思議な
現象を、まだよく呑みこんでいなかったからなのでした。十一月の末、自分は、
堀木と神田の屋台で安酒を飲み、この悪友は、その屋台を出てからも、さらにどこ
かで飲もうと主張し、もう自分たちにはお金が無いのに、それでも、飲もう、飲もう
よ、とねばるのです。その時、自分は、酔って大胆になっているからでもありました
が、

「よし、そんなら、夢の国に連れて行く。おどろくな、酒池肉林という、……」

「カフエか?」

「そう」

「行こう!」

というような事になって二人、市電に乗り、堀木は、はしゃいで、

「おれは、今夜は、女に飢え渴いているんだ。女給にキスしてもいいか」

自分は、堀木がそんな酔態を演じる事を、あまり好んでいなかった。堀木も、
それを知っているので、自分にそんな念を押すのでした。

「いいか。キスするぜ。おれの傍に坐った女給に、きっとキス

して見せる。いいか」

「かまわんだろう」

「ありがたい！おれは 女 に飢え渴いているんだ」

銀座四丁目で降りて、その所謂酒池肉林の大カフェに、ツネ子をたのみの綱としてほとんど無一文ではいり、あいているボックスに堀木と向い合って腰をおろしたとたんに、ツネ子ともう一人の女 給 が走り寄って来て、そのもう一人の女 給 が自分の傍に、そうしてツネ子は、堀木の傍に、ドサンと腰かけたので、自分は、ハツとしました。ツネ子は、いまにキスされる。

惜しいという気持ではありませんでした。自分には、もともと所有慾というものは薄く、また、たまに幽かに惜しむ気持はあっても、その所有権を敢然と主張し、人と争うほどの気力が無いのでした。のちに、自分は、自分の内縁の妻が犯されるのを、黙って見ていた事さえあったほどなのです。自分は、人間のいざこざに出来るだけ触りたくないでした。その渦に巻き込まれるのが、おそろしいでした。ツネ子と自分とは、一夜だけの間柄です。ツネ子は、自分のものではありません。惜しい、など思い上った慾は、自分に持てる筈はありません。けれども、自分は、ハツとしました。自分の眼の前で、堀木の猛烈なキスを受ける、そのツネ子の身の上を、ふびんに思ったからでした。堀木によごされたツネ子は、自分とわかれなければならなくなるだろう、しかも自分にも、ツネ子を引き留める程のポジティヴな熱は無い、ああ、もう、これでおしまいなのだ、とツネ子の不幸に一瞬ハツとしたものの、すぐに自分は水のように素直にあきらめ、堀木とツネ子の顔を見較べ、にやにやと笑いました。

人間失格 女 だったのでした。案外とも、意外とも、自分には霹靂に撃ち醉漢のキスにも価いしない、ただ、みすぼらしい、貧乏くさい飲んでみたい気持でした。所謂俗物の眼から見ると、ツネ子は笑するでした。『お酒を。『やめた！』『さすがのおれも、こんな貧乏くさい女 には、……』自分は、小声でツネ子に言いました。それこそ、浴びるほど閉口し切ったように、腕組みしてツネ子をじろじろ眺め、と堀木は、『お金は無い』口をゆがめて言い、

しかし、

じたい じつ おも わる てんかい
事態は、実に思いがけなく、もっと悪く展開せられ

くだかれた思いでした。自分は、これまで例の無かったほど、

いくらでも、いくらでも、お酒を飲み、ぐらぐら酔って、ツネかな子と顔を見合せ、哀

しく微笑み合い、いかにもそう言われてみると、こいつはへんに疲れて貧乏くさい

だけの女だな、と思うと同時に、金の無い者どうしの親和(貧富の不和は、陳腐の

ようでも、やはりドラマの永遠のテーマの一つだと自分は今では思っています)

しあわせ まね こ あ らい こ うま
そいつが、その親和感が、胸に込み上げて来 ほほえて、ツネ子がいとしく、生れてこの

とき せつきよくてき びじやく こい こころ うご じかく は
時はじめて、われから積極的に、微弱ながら恋の心の動くのを自覚しました。吐

きました。前後不覚になりました。お酒を飲んで、こんなに我を失うほど酔ったのも

、その時がはじめてでした。眼が覚めたら、枕もとにツネ子が坐っていました。

ほんじょ だいく にかい へや ね かね き えん き
本所の大工さんの二階の部屋に寝ていたのでした。「金の切れ目が縁の切れ目、

じょうだん おもう
なんておっしゃって、冗談かと思

にんげんしあわせ あそ い い
人間失格覚悟は、出来ていなかったのです。どこかに「遊び」がひそん生きて行け

ていあん きがる どうい かね うんどう おんな がくぎょう
そもそも、そのひとの提案に気軽に同意しました。金、れいの運動、女、学業

かんが うえ じぶん よ なか きょうふ
、考えると、とてもこの上こらえてようでしたし、また、自分も、世の中への恐怖、

ことば で おんな にんげん いとな つか き
わざらわしさ、言葉がはじめて出て、女も人間としての営みに疲れ切っていたでい

ました。めやな。うちが、かせいであげても、だめか」「だめ」その日の午前、二人は

あさくさ ろっく のむ とき じっかん
浅草の六区をさまよっていました。喫けれども、その時にはまだ、実感としての「

し おんな やす よるあ おんな くち し
死のう」というそれから、女も休んで、夜明けがた、女の口から「死」という

ほんき らい き
うていたら、本気か。来てくれないのだもの。ややこしい切れ

さてん ぎゅうにゅう の
茶店にはいり、牛乳を飲みました。

はら お じぶん た たもと ぐち だ
しゅうち「あなた、払うて置いて」たもと自分は立って、袂からがま口を出し、

どうせん さんまい しゅうち せいさん おも おそ
ひらくと、銅銭が三枚、せいさんのうり羞恥よりも凄惨の思いに襲われ、

のうり うか せんゆうやかた じぶん へや せいふく ふとん のこ
たちまち脳裡に浮ぶものは、仙遊館の自分の部屋、制服と蒲団だけが残されて

しちぐさ ひと な こうりょう へや ほか
あるきりで、あとはもう、質草になりそうなものの一つも無い荒涼たる部屋、他に

は自分のいま 着て歩いている 絹の着物と、マント、これが自分の現実なのだ、生きて行けない、とはっきり思い知りました。自分がまごついているので、女も立って、自分がま口をのぞいて、「あら、たったそれだけ?」無心の声でしたが、これがまた、じんと骨身にこたえるほどに痛かったです。はじめて自分が、恋したひとの声だけに、

痛かったです。それだけも、これだけもない、銅銭三枚は、どだいお金でありません。それは、自分が未だかつて味わった事の無い奇妙な屈辱でした。とても生きておられない屈辱でした。所詮その頃の自分は、まだお金持ちの坊ちゃんという種属から脱し切っていなかったのでしょう。その時、自分は、みずからすすんでも死のうと、実感として決意したのです。

その夜、自分たちは、鎌倉の海に飛び込みました。女は、この帯はお店のお友達から借りている帯やから、と言って、帯をほどき、畳んで岩の上に置き、自分もマントを脱ぎ、同じ所に置いて、一緒に入水しました。

女のひとは、死にました。そうして、自分だけ助かりました。自分が高等学校の生徒ではあり、また父の名にもいくらか、所謂ニュース・ヴァリュがあったのか、新聞にもかなり大きな

問題として取り上げられたようでした。

自分は海辺の病院に収容せられ、故郷から親戚の者がひとり駆けつけ、さまざまの始末をしてくれて、そうして、くにの父をはじめ一家中が激怒しているから、これっきり生家とは義絶になるかも知れぬ、と自分に申し渡して帰りました。けれども自分は、そんな事より、死んだツネ子が恋いしく、めそめそ泣いてばかりいました。本当に、今までのひとりの中で、あの貧乏くさいツネ子だけを、すきだったのですから。

下宿の娘から、短歌を五十も書きつらねた長い手紙がきました。「生きくれよ」というへんな言葉ではじまる短歌ばかり、五十でした。また、自分の病室に、看護婦たちが陽気に笑いながら遊びに来て、自分の手をきゅっと握って帰る看護婦もいました。

自分の左肺に故障のあるのを、その病院で発見せられ、これがたいへん自分に好都合な事になり、やがて自分が自殺幇助罪という罪名で病院から警察に連れて行かれましたが、警察では、自分を病人あつかいにしてくれて、特に保護室に収容しました。深夜、保護室の隣りの宿直室で、寝ずの番をしていた年寄りのまわあいだお巡りが、間のドアをそっとあけ、「おい!」と自分に声をかけ、「寒いだろう。こっちへ来て、あたれ」と言いました。自分は、わざとしおしおと宿直室にはいって行き、椅子に腰かけて火鉢にあたりました。「やはり、死んだ女が恋いしいだろう」

「はい」

ことさらに、消え入るような細い声で返事しました。

「そこが、やはり人情というものだ」

かれしだいおおかまらい
彼は次第に、大きく構えて来ました。

「はじめ、女と関係を結んだのは、どこだ」

ほとんどの裁判官の如く、もったいぶって尋ねるのでした。彼は、自分を子供とあなどり、秋の夜のつれづれに、あたかも彼自身が取調べの主任でもあるかのように装い、自分から猥談めいた述懐を引き出そうという魂胆のようでした。自分は素早くそれを察し、噴き出したいのを憶えるのに骨を折りました。そんなお巡りの「非公式な訊問」には、いっさい答を拒否してもかまわないのだという事は、自分も知っていましたが、しかし、秋の夜ながら興を添えるため、自分は、あくまでも神妙に、その

お巡りこそ取調べの主任であって、刑罰の軽重の決定もそのお巡りの思召し一つに在るのだ、という事を固く信じて疑わないような所謂誠意をおもてにあらわし、彼の助平的好奇心を、やや満足させる程度のいい加減な「陳述」をするのでした。

「うん、それでだいたいわかった。何でも正直に答えると、わしらのほうでも、そこは手心を加える」

ねが
「ありがとうございます。よろしくお願ひいたします」

にゅうしん えんぎ
ほとんど入 神の演技でした。そして、自分のためには、何も、一つも、とくになら
りきえん
ない力演なのです。

よる あ じぶん しょちょう よ だ
夜が明けて、自分は署 長に呼び出されました。こんどは、本式の取調べなのです。

しょちょうしつ
ドアをあけて、署 長室にはいったとたんに、

おとこ まえ わる
「おう、いい男 だ。これあ、お前が悪いんじゃない。こんな、い
おとこ う まえ わる
い 男 に産んだお前のおふくろが悪いんだ」

いろ あさぐろ だいがくで かん わか しょちょう
色の浅黒い、大学出みたいな感じのまだ若い署 長でした。いきなりそう言われて
じぶん じぶん かお はんめん あかあざ
自分は、自分の顔の半面にべったり赤痣でもあるような、みにくい不具者のような、
みじめな気がしました。

じゅうどう けんどう せんしゅ しょちょう とりしら じつ
この柔 道か剣道の選手のような署 長の取調べは、実にあっさりしていて、あの
しんや ろうじゅんさ しつよう こうしょく とりしら うんでい さ
深夜の老巡査のひそかな、執拗きわまる好 色の「取調べ」とは、雲泥の差があり
ました。訊問がすんで、署 長は、検事局に送る書類をしたためながら、

じょうぶ けったん で
「からだを丈夫にしなけれや、いかんね。血痰が出ているようじゃないか」

い
と言いました。

あさ せき で じぶん せき で
その朝、へんに咳が出て、自分は咳の出るたびに、ハンケチで

い
と言いました。

それから

かくへいき
核兵器

で らい
出て来て、

しん
真

そし

ちょう
長 は、

けんじきょく おく しょるい
検事局に送る書類をしたためながら、

じょうぶ
「からだを丈夫にしなけれや、

いかんね。

りしていて、

じゅうどう けんどう せんしゅ しょちょう とりしら
この柔道か剣道の選手のような署長の取調べは、

じつ
実にあっさ

しんや ろうじゅんさ
あの深夜の老巡査のひそかな、

うんでい さ
雲泥の差がありました。

じんもん しょしつよう こうしょく
訊問がすんで、署執拗きわまる好色

とりしら
の「取調べ」とは、

た

い じぶん
きなりそう言われて自分は、

いろ あさぐろ
色の浅黒い、

だいがくで かん わか しょちょう
大学出みたいな感じのまだ若い署長でした。

じぶん かお はんめん あかあざ
、自分の顔の半面にべったり赤痣で

おとこ う まえ わる
い 男 に 産んだ お前 の おふくろ が 悪い んだ」

もある ような、

ふぐしゃ
みにくい 不具者 の ような、

き
みじめな 気が しまし

くち おお
口を 覆っていたのですが、 その ハンケチ に 赤い あられ が 降った みたいに 血が ついて いた
の です。 けれども、 それは、 のど から 出た 血 ではなく、 昨夜、 耳の 下 に 出來た 小さい
おでき を いじって、 その おでき から 出た 血 な の で した。 しかし、 自分は、 それ を 言い 明
さない ほ う が、 便 宜 な 事 も ある ような 気 が ふ つ と し た も の で す か ら、 た だ、

ふせめ しゅしょう こた お
と、 伏 眼 に な り、 殊 勝 げ に 答 え て 置 き ま し た。

「はい」

しょちょう しょよい か お
署 長 は 書 類 を 書 き 終 え て、

きそ けんじどの まえ みもとひきうけにん
「起訴 に な る か ど う か、 そ れ は 檢 事 殿 が き め る こ と だ が、 お 前 の 身 元 引 受 人 に、
でんぱう でんわ よこはま けんじきょく らい
電 報 か 電 話 で、 き ょ う 横 浜 の 檢 事 局 に 来 て も ら う よ う に、 た の ん だ ほ う が い い な。
だれ まえ ほごしゃ ほしょうにん
誰 か、 あ る だ ろ う、 お 前 の 保 護 者 と か 保 証 人 と か い う も の が」

こ っ と う

ちち とうきょう べっそう で い しょがこ っ と う しょ しぶた じぶん どうきょうじん
父 の 東 京 の 別 荘 に 出 入 り し て い た 書 画 骨 董 商 の 渋 田 と い う、 自 分 た ち と 同 郷 人
ちち も やく つと どくしん よんとみお じぶん
で、 父 の た い こ 持 ち み た い な 役 も 勤 め て い た ず ん ぐ り し た 独 身 の 四 十 男 が、 自 分 の
が っ こ う ほ し ょ う に ん じぶん おも だ おとこ かお こ と め
学 校 の 保 証 人 に な っ て い る の を、 自 分 は 思 い 出 し ま し た。 そ の 男 の 顔 が、 殊 に 眼
に ちち おとこ よ じぶん
つ き が、 ヒ ラ メ に 似 て い る と い う の で、 父 は い つ も そ の 男 を ヒ ラ メ と 呼 び、 自 分 も、
よ そ う 呼 び な れ て い ま し た。

じぶん けいさつ でんわち ょう か いえ でんわばんごう さが み
自 分 は 警 察 の 電 話 帳 を 借 り て、 ヒ ラ メ の 家 の 電 話 番 号 を 捜 し、 見 つ か っ た の で、
でんわ よこはま けんじきょく らい たの ひと
ヒ ラ メ に 電 話 し て、 横 浜 の 檢 事 局 に 来 て く れ る よ う に 頼 み ま し た ら、 ヒ ラ メ は 人 が

かわ いば くちょう ひきう
変ったみたいな威張った口調で、それでも、とにかく引受けってくれました。

「おい、その電話機、すぐ消毒したほうがいいぜ。何せ、血痰が出ているんだから」

じぶん ほごしつ ひ あ まわ げん
自分が、また保護室に引き上げてから、お巡りたちにそう言
しょちょう おお こえ ほごしつ すわ じぶん みみ
いつけている署長の大きな声が、保護室に坐っている自分の耳にまで、とどきまし
ひる じぶん ほそ あさなわ どう しば かく ゆる
た。お昼すぎ、自分は、細い麻縄で胴を縛られ、それはマントで隠すことを許され
あさなわ はし わか まわ にぎ ふたりいっしょ でんしゃ
ましたが、その麻縄の端を若いお巡りが、しっかり握っていて、二人一緒に電車で
よこはま むか じぶん すこ ふあん な けいさつ ほごしつ
横浜に向いました。けれども、自分には少しの不安も無く、あの警察の保護室も、
ろうじゅんさ あ あ じぶん ざいにん しば
老巡査もなつかしく、嗚呼、自分はどうしてこうなのでしょう、罪人として縛られ
ると、かえってほっとして、そうしてゆったり落ちついて、その時の追憶を、いま書
あた ほんとう たの きもち お とき ついおく か
くに当っても、本当にのびのびした楽しい気持になるのです。しかし、その時期の
おも で なか ひと れいかんさんと しょうがい じき
なつかしい思い出の中にも、たった一つ、冷汗三斗の、生涯わすれられぬ悲惨な
じぶん けんじきょく うすぐら いっしつ けんじ かんたん とりしら
しくじりがあったのです。自分は、検事局の薄暗い一室で、検事の簡単な取調べ
う
を受けま

けんじ よんじゅっさいぜんご ものしづ じぶん びぼう い
した。検事は四十歳前後の物静かな、(もし自分が美貌だったとしても、それは謂わ
じやいん びぼう ちが けんじ かお ただ びぼう い
ば邪淫の美貌だったに違いありませんが、その検事の顔は、正しい美貌、とでも言い
そうめい せいひつ けはい も ひとがら
たいような、聰明な静謐の気配を持っていました)コセコセしない人柄のようでした
じぶん まったく けいかい ちんじゅつ
ので、自分も全く警戒せず、ぼんやり陳述していたのですが、

とつぜん せき で らい じぶん たもと だ ちみ
突然、れいの咳が出て来て、自分は袂からハンケチを出し、ふとその血を見て、
せき なに やく た し かけひ こころ おこ
この咳もまた何かの役に立つかも知れぬとあさましい駆引きの心を起し、ゴホン、
ふた にせ せき おおげさ つ くわ くち
ゴホンと二つばかり、おおおげさまけの匱の咳を大袈裟に附け加えて、ハンケチで口
おお けんじ かお み かんいっぽつ
を覆ったまま検事の顔をちらと見た、間一髪、

「ほんとうかい?」

ものしづかな微笑でした。冷汗三斗、いいえ、いま思い出しても、きりきり舞いをしちゅうがくじだい ばかたくなります。中学時代に、あの馬鹿

たけいち
の竹一から、ワザ、ワザ、と言われて脊中^いせなか^{せなか}を突かれ、地獄に蹴落^つけおとされた、
その時の思い以上^{とき おも いじょう}と言っても、決して過言^いでは無い気持ちです。あれと、これと、二
つ、自分の生涯^{じぶん しょうがい}に於ける演技の大失敗^{お えんぎ だいしつぱい}の記録です。検事のあんな物^{もの}静かな侮蔑^{ふべつ}
ぶべつに遭うよりは、いっそ自分は十年の刑を言^いい渡されたほうが、ましだったと
思う事さえ、時たまある程なのです。

じぶん
自分は起訴猶予^{きそゆうよ}になりました。けれども一向にうれしくなく、世にもみじめな気持で^{いっこう よ}
、検事局の控室^{けんじきょく ひかえしつ}のベンチに腰かけ、引取り人のヒラメが来るのを待っていました。^{きもち ま}

はいご
背後の高い窓から夕焼けの空が見え、鷗^{こう}かもめが、「女」^{おんな}という字みたいな形で^{じ かたち}
と飛んでいました。

だいさん しゅき 第三の手記

1

たけいち
竹一の予言^{よげん}の、一つは当たり、一つは、はずれました。^ほ惚^ほれられるという、名譽^{めいよ}で無^な
い予言^{よげん}のほうは、あたりましたが、きっと偉い絵画^{えら ええが}きになるという、祝福^{しゅくふく}の予言^{よげん}は
、はずれました。自分は、わずかに、粗悪な雑誌^{じぶん そあく}の、無名の下手な漫画家^{ざっし むめい へた まんがか}になる事が^{こと}
でき出来ただけでした。